

5月27日(金) 14:50~15:30(第2分科会)

宋代越州窯の再考 - 唐宋金銀器との相関性からの一試論 -

慶應義塾大学 三笠 景子

19世紀末から20世紀初頭、欧米や日本を中心として、多くの収集家や研究者らが中国陶磁の神秘的な美しさに魅了された。なかでも、中国浙江省北部慈溪市の上林湖周辺にひろがった越州窯では、晚唐五代そして宋時代まで、美しい青磁を生産したことが古文献とわずかな出土資料によって、早くから知られていた。

こうして越州窯青磁は中国陶磁研究の草創期から注目を集め、その結果詩文や朝貢記録など各時代の豊富な文献資料の考証と、戦後は中国国内の窯址調査、更に朝鮮半島、日本、東南アジア諸国、中東など諸地域における遺跡発掘調査など考古学的見地によって、三国時代から南宋時代のおよそ1000年に及ぶ展開が明らかになった。1970年代、80年代の臨安五代墓や法門寺「秘色」青磁の発見が相次ぎ、90年代以降は上海における「越窯、秘色瓷国際学术討論会」(95年)や「越窯国際学术討論会」(2002年)など総括的な研究報告が行われるに至っている。更に、2002年には慈溪市寺竜口窯址の発掘調査報告が新たに行われるなど、現在進行形で越州窯研究は進められている。

越州窯に光があてられておよそ1世紀が過ぎ、近年注目される研究テーマとは、閉窯の時期はいつであるかという問題である。その原因について先行研究では、北宋時代になると紀年資料・出土資料が少なくなると考えられてきたことから、呉越国の滅亡による衰退説、農業への産業体制転換説などが挙げられたが、統一した見解を得ていない。しかし寺竜口窯址より南宋時代の生産活動が明らかになった現在、越州窯最後の様相は宋時代の他窯の生産背景をも内包する重要な問題であるといえるだろう。

発表者は今後の越州窯研究、延いては宋代の、特に江南諸窯の研究に必要となるのは、これまで中心であった考古学的見地に加えて、改めて美術史学的な視点であると考える。南宋時代の中国陶磁生産“爛熟”の芽は、ひとつに五代北宋時代の越州窯青磁の姿にあるのではないだろうか。玉の美しさを目指したといわれる無文の「秘色」青磁とは一転し、龍や鳳凰、鸚鵡や人物文、唐草文、つる草文などの線刻文様を見込み、さらに高台を除く器面全体に施す賑やかな姿には勢いさえ感じられ、一言でこれが終焉に至る最後の様相とは言い難いものがある。そしてこれには中唐以降の金銀器からの強い影響が認められるのである。共に皇帝貴族への朝貢品であった金銀器と越州窯青磁の相関性の背景には、当時の社会史、文化史からの深い考察が必要であろう。

本発表では、五代北宋時代の越州窯青磁の器形と装飾文様の特徴を、唐宋金銀器の造形からの影響とする一試論をたて比較検討し、その相関性の一因を越州窯と金銀器の双方の生産背景、また晚唐から呉越、北宋へと至る社会的背景にもとめ、この傾向が越州窯衰退の一因となったことを明らかにする。